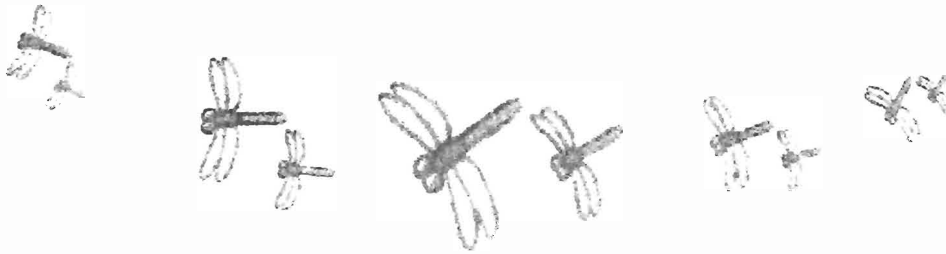


井戸端だより

第59号

発行日：2007. 10. 2

発行：くらしの学習会



も く じ

9月例会報告	1
行ってみたアメリカメイン州・カナダ	2
「マイ箸持参」考	9
ジャコウアゲハの舞う庭に！	11
ボランティア	13
ストレスは怖い	15
雑感	16
学問とは氷のやうな物なり	18
中国児童教育援助協会資料	21

9月例会 内子町五十崎 堂ヶ谷トンボの里へ

9月18日（火）会員5人が松山から、五十崎で1人合流し6人で自治体職員案内で「手漉き和紙工場」を見学し「堂ヶ谷トンボの里」を散策してきました。

自治体の車に乗り換え「手漉き和紙工場」へ。昔ながらの工場では、ふんだんに水が流れその中で和紙の原料が晒され、女性二人が前屈みのきつい姿勢で一枚一枚丁寧に紙漉きの作業をしていました。加重をかけ水切りをした後、熱をかけ乾燥していました。暑さ、寒さ、重く、きつい姿勢での作業は大変な仕事だと感じました。

その後、香林寺方面へ。香林寺の駐車場から山道を5分程度上って行くと「堂ヶ谷トンボの里」の上池が見えてきました（この説明はガイドブックの文を読んで下さい）暑く昼間の時間だった為か残念ながら多くのトンボを見ることは出来ませんでした。山間の涼しい空気にホッとしました。帰り際、唯一「赤とんぼ」が私たちの近くに姿を見せてくれ、残暑厳しい中で秋の訪れを感じさせてくれた一時でした。

その後は、五ヶ崎出身のMさんの案内で昼食をいただき、Mさんのお勧めポイントを巡り、お宅におじゃまをし、しばしの話し合いを持ち、帰路に就きました。 A・M

平成10年に上池付近で自然ウォッチング「トンボと遊ぼう」を行ったところナニワトンボがみつかり、ナニワトンボの南限が五十崎町までのびることとなりました。このことにより自然環境に恵まれた上池周辺でのトンボ観察会を重ねた結果、多くの種類のトンボが確認され、天神小学校や五十崎中学校にも大変近いことから、池上部の休耕田にピオープを造る話が急浮上してきました。そして平成12年3月25日には、休耕田を無償で借用させていただき、トンボ池の完成となったのです。（翌年には、隣接する畑も無償で借用）しかし、池の完成は、出発でもあったのです。公民館の呼びかけで、地域の方や観察会に参加した子どもたちに植栽などのボランティア活動をしていただきました。そのボランティア活動をしていただいた方々が中心となり、平成13年7月17日に「堂ヶ谷トンボの会」を結成されました。その後、上池の補修工事も完了し、水利組合関係者・トンボの会のメンバーに草刈などのボランティア活動をしていただいております。公民館では、このトンボ観察会のほかにも池干しに参加したり植物観察会などの学習活動をしたりしています。〈ガイドブックより〉

行ってみたアメリカメイン州・カナダ

今回は、8月26日から、夫の国際学会出席に同伴して、アメリカメイン州を皮切りに、是非一度は行ってみたいと思っていたカナダに行ってきた。

8月26日、実家の父の目の手術、思いがけない脳の手術の経過良好を見届け、中部国際空港からあわただしく飛び立ったときは、ぐったり疲れていた。11時間にわたる飛行機の長旅も、エコノミークラスはアルコール類も映画もすべて有料というノースウエスト航空のサービスの悪さに、起きている楽しみもなくずっととうとうとしていた。デトロイトで、兩人差し指の指紋と写真をとられるというアメリカの入国審査を経て、トランジット10時間のため、すぐ絵はがきを買い家族に書く。デトロイトから目的地のメイン州バンゴール空港へは50人乗りの小さい飛行機で。空港に着いたのは、現地時間26日深夜だったが、学会のスタッフ（大学院生）が迎えに来てくれていた。早速その車で学会期間中ずっと滞在するオロノにあるメイン大学のホテルへ直行。大学都市オロノは、森林に囲まれた町のような。

次の日は、6時には起きて朝食（ベーグル、コーヒー、ジュース、果物）をとり、7時15分の迎えの車で、メイン大学へ。今回の主催側責任者はライス教授。彼の奥さんとは4年前ルーマニアの学会で、よく話した仲で、今回も会えるのを楽しみにしていた。カナダのルシルとは3回目、思わず抱き合った。愛媛大学で博士号を取ったパキスタン人アフザル教授（私の日本語の教え子）はカナダから奥さん（カウサルさん）を伴い参加。奥さんとは初対面だったが、すぐうち解けた。アメリカテネシーから参加のナンシーは娘が名古屋で英語を教えていたとか。東雲高校の交換留学生をホームステイで預かったことがあり、その女性は、今は東京で通訳をしていて、娘の結婚式にも参加してくれたとか。愛媛にはその縁で行ったことがあるという。松山城も、今治のタオル博物館も訪れたという、まさに親日家。世界は何と狭いことか。夫たちが、学会の間、いつものごとく同伴者コースで、初日はデイバッグなどで有名なLL・Beansの大ショッピング街へ連れて行ってもらった。同伴者は8人（アメリカ3人、カナダ1人、カナダ在アルゼンチン1人、カナダ在パキスタン1人、ノルウェー1人、日本1人）+1歳のニコラス（ノルウェー）で共通語は英語。私は、カウサルさんと一緒に行動した。10時半頃ついたが、あとは自由に過ごし、3時半に駐車場集合とのこと。私たち二人はあまりショッピングには興味がないので、持て余したが、昼食に地元の料理（シーフードの球状コロッケ）を食べながら、じっくり話すことができた。カウサルさんは、大学生の娘と高校生の息子の二人の子供をもち、娘はアフザルさんの大学で英語を専攻しているとのこと。娘は、幼い時代を過ごした日本の生活を懐かしく思っているそうで、何とかチャンスを見つけて日本へ再び行きたいと言っているとか。現在一家はカナダ国籍をとっているの、ALTの募集要項を調べて教えてあげることになった。3時半に駐車場に集合したとき、買い物好きなグループは両手に一杯の荷物を抱えていた。夕食は、学会会場の大学で夫たちと一緒にとる。アルコールは一切なし。

二日目は、参加者全員のツアー。8時に大学に集合して、同伴者も含めてキャンパスツアーへ。メイン大学は木質材料を使った防衛システムの提案コンペティションで優勝し、

政府から多額の予算が出ているとか。その宣伝ビデオは戦闘シーンから始まるショッキングなものだったが門外漢の私には内容は理解できない。10時頃大型バスに乗り込み、メイン州の名勝地 Bar Harbor へ。避暑地として有名で、多くの観光客が集まっている。青い海に何隻ものヨットや船。Acadia National Park は切り立った崖、打ちつける荒波、赤い岩のごろごろある海辺、長く続く砂浜、Cadillac 山からの素晴らしい眺め、海に浮かぶ島々。海辺でサンドイッチを食べた。ライス教授夫人が庭でできたというプチトマトをみんなに配ってくれた。甘くておいしい。砂浜の方へ行く人と分かれて、私たち何人かは1時間くらいかけて Gorham 山に登る。ノルウェーの若い母モニカは実にたくましい。ニコラスを抱えて頂上まで登る。登った人全員で記念写真を撮る。浜辺の方へ行った人の中で、イタリアの2人が海で泳いだとか。夕食はこのあたりで一番有名な料理ロブスターに、ムール貝。アフザルさん夫妻と同じテーブルになる。直前アフザルさんは、一家で10年ぶりにパキスタンに帰っていたとか。ドバイなども旅行したらしい。私たちが、学会後カナダのケベックへ行くことを話すと、是非自分の家へ寄って行ってくれと言う。車でここから3時間の所とのこと。今回は仕事で来ているので、予定を勝手に変えられないためお断りしたが、次回必ず伺うことを約束する。日本の大学で学んだ人が、海外で活躍しているのを見るのは本当にうれしい。今後の更なる活躍を期待したい。お互いの研究や人材交流のために将来強力なコネクションができるといいと思う。

三日目、同伴者グループは、Rockland の美術館や古いアメリカの家の見学。美術館は19世紀のアメリカの画家のコレクションで、特に興味は沸かないが、古い家は、19世紀当時の庶民の生活がうかがえて面白かった。古いミシンやどのように使用したか想像もつかない子供の便器を間に挟んだ三人がけのトイレ、メイドや運転手の部屋、ピアノオルガンなども興味深い。体格が小さかったのか、ベッドも、家具も、衣装もこぢんまりしている。全員昼は同じレストランで食べた。典型的なアメリカの昼食、チキンかビーフのサンドイッチにフライドポテト。ポテトの量の何と多いことか。夕食は、大学で。ルシールのご主人はカナダ、ケベックのラバル大学の教授イヴさん。フランス系カナダ人の二人が、揃って私たちのテーブルに来てくれた。ルシールが67歳だと言うことは、美術館のシニア割引で知ったが、ご主人は若干年下か。細身の体つきのイヴさんは、いつもダンディーで、おしゃれ。カナダの定年について聞いてみたが、決まっていはいないとか。普通は60とか、65とかでリタイアする人が多いが、自分は、就職が遅かったので、まだやめないと。二人はフランス系なので、5年間バンクーバーで生活したときは大変だったとか。ルシールはテレビで英語を覚えたという。イヴという名前はフランスでは、男女ともにあるのに、バンクーバーでは女の名前だと言われたそう。明後日彼らは、ケベック市までマイカーで5時間以上かけて帰るとのこと。飛行機で彼地を訪れる私たちを、9月1日朝10時にホテルまで迎えに来てくれるということだった。

学会最終日は、夫の発表日。同伴者組の予定は何も入っていなかったが、ルシールに誘われて行動をともにすることにした。実は私の場合、バンゴール空港へ着いた時深夜で、預けたスーツケースをよく確かめずに受け取ったのだが、後でよく見たら、キャリーの部分は見事に壊れ、本体にも亀裂が大きく入っていたのだ。これでは、次の予定地まで行けない。とりあえずスーツケースを手に入れなければならない。そのことを、世話役の大学院生レベッカに話すと、何とか時間を割いて、買いに連れて行ってくれると言う。ナン

シーがスーツケースの半額セール of 広告を見つけ、教えてくれた。結局、他の人と一緒に出かけ、店が開くまでの、数時間を町の見学に費やし、店が開く頃に私一人レベッカにモールの店に連れて行ってもらった。おかげで 280 ドルのいい鞆が、半額で手に入った。その後、他の人たちが先に行っている市民の森へ行き、赤苔が一面生えている尾瀬のような湿地帯の板の道を急ぎ足で追いつく。夕方は大学で学会最終日のお別れパーティー。ルーマニアや中国での学会とは全く違い、大きなピザパイが 3 種類にビール・ワインのそれだけ。これがまさにアメリカなのか。それでも、よく食べ、よく飲み、別れを惜しんだ。

31 日は、朝 7 時半にホテルを出てバンゴール空港へ。ノースウエスト航空にスーツケースのクレームを申し出たが、24 時間以内に言ってこなければ受け付けないとのこと。日本人としては、素直にルールに従う。すぐ調べなかったのは確かに悪い。

バンゴールからトロントへ、トロントからケベック市へは何と 19 人乗りの飛行機。キャビンアテンダントはいなくて、副操縦士が緊急時の説明をする。勿論飲み物のサービスはなし。ところで、アメリカ・カナダの空港では、トイレは、自動洗浄式が多かった。洗った手を拭く紙も、手をかざすと、必要分だけ紙が出てくるところが多かった。日本で最近増えている自動洗浄式トイレに疑問を感じていたのだが、ここでもお節介なトイレが多くて驚いた。トイレといえば、必ずドアの下の部分が大きく空いていて、ドアの隙間も 1 センチ近く空いているが、これはレイプ対策のようだ。ケベックのホテルへはタクシーで一律 30 カナダドル。クラシックないいホテルだが、エレベーターのないのが難。自分で三階まで、スーツケースを持って上らなければならないが、部屋は素晴らしい。早速荷物を置いて、町の探索へ。ヨーロッパ式の建物の中に、シャトーフロントナック（ホテル）がそびえ立つ。勾配のある下町の路地には、店が並んでいて、人通りも多い。セントローレンス川沿いにシタデル（要塞）まで続く板張りのテラスは、散歩に最適。表示も耳にする言葉もフランス語で、私たちにとっては、何だか懐かしい。ずっと歩き続け、ホテル近くにあるケベック州議事堂まで戻ってくる。ホテルの前のグラン・ダレ通りは、両側にオープンテラスが並び、パリを思わせる。夕食は私たちも外で、行き交う人を眺めながらとなった。

9 月 1 日は、朝早くから道路掃除の車の音がする。前の道は、普段は両側駐車可なのだが、この日は時間を限って禁止。何故？ と思っていたが、迎えに来てくれたイヴさん夫妻の話で了解する。1 週間前にケベック市の女性市長が 70 歳で急死したとのこと。彼女は、厳しい反面、とても心優しい人で人気があったという。この通りを棺が通るらしい。半旗も掲げられていた。まずラバル大学を案内してもらおう。素晴らしい大学。広々としたキャンパスに、堂々とした建物が美しい。中の設備もけた外れ。夫曰く、このような素晴らしい設備を持った大学は日本にはないとのこと。その分野のカナダにおける重点大学ということで、設備だけで 8 億（円）、建物だけで 24 億という予算が下りているということだった。私が一番驚いたのは、すべてが整理整頓されていて美しいことと、どの研究室もドアに大きな透明ガラスがはめられていたことで、後者はセクハラ対策かと思われた。ごみの分別もしっかりなされているようだった。町は、例の葬儀で混雑するので、車で郊外へ連れて行ってくれた。この車は、ルシールので、アメリカ製。イヴさんが言うには、日本車はとてもいいが高いとのこと。ルシールが、イヴは金持ちなので、日本車のマツダに乗っているが、私はお金がないのでアメリカ車だという。高いのに、アメリカ・カナダで

日本車が多く見られたのは、性能とアフターサービスの良さが理由だろうか。お昼を軽くとり、ビールを飲む。運転のイヴさんも飲む。アメリカのアルコールへの厳しさに比べ、カナダは規制が緩いのか。サンタンヌ・ド・ボーブレ大聖堂は、聖母マリアの母アヌをまつており、難破した船の乗組員がアヌに祈ったら奇跡的に助かったことから、座礁現場近くに建てられたとのこと。天井のモザイク、お祈りの椅子の木彫り、ステンドグラスすべてボランティアによる手作りとのこと、世界中から特に体の不自由な人が、奇跡を求めてやってくるという。柱には、使わなくなった松葉杖がいくつもかけてあった。丁度結婚式の最中で指輪交換の光景を見た。この教会で結婚式を挙げることができるのは、相当の金持ちとのこと。イヴさん曰く、2・3年後には別れるだろうと。カナダでは、離婚率は50%以上だとか。自分たちのように何十年も連れ添った夫婦は珍しいという。次に訪れたのは、落差がナイアガラの1.5倍の83mもあるというモンモラシーの滝。何百段もある階段を上り、滝の真上に掛かっている吊り橋を渡る。迫力満点。雪解けの5月初旬は、もっと迫力が増すとのこと。ダウンタウンに戻ってぶらぶら歩く。野外舞台上で歌を歌っている人をみんなが座って眺めている広場に出た。何気なく観客を眺めていると、何と松山から2年前に国に帰ったJ氏がその中にいた。信じられない。大学でフランス語を教えている、非常勤講師控え室で会うたびに話していたあの紳士J氏が、目の前にいる。しかも大きく変わった姿で。私たちは再会を喜び合ったが、私は再会できた喜びと、彼のあまりの変貌ぶりへのショックで複雑だった。近くに住んでいること、仕事は引退して、今は本を書いていることなどを彼から聞いただけで、住所も尋ねずに別れた。それ以上聞いては、彼の自尊心を傷つけてしまう気がしたからだ。夕食は、私たちが近くの人気のあるパブに、イヴさん夫妻を招待した。ルシールにJ氏と会った時の私の気持ちを話したら、彼女はよくわかると言ってくれた。イヴさんは、ビールをしっかりと飲み、車で帰っていった。勤めたわけではないが、日本なら飲酒運転補助になってしまうだろう。お国柄か。

9月2日、ケベック市を出て、ポストンを経由しサスカトゥーンへ。空から見る光景は、まさに大平原。このあたりは、大穀倉地帯。空港へは、夫が15年前北極で共同調査をしたサスカトゥーン大学教授のジムと奥さん（スーザン）が迎えに来てくれた。ジムは松山にも来て、うちに泊まったこともある。その時は亡くなった前の奥さんと一緒だった。彼の車は27年前のもので、塗装は剥げているが、走行に何の支障もない。ジムの家に荷物を置いて、大学を案内してもらおう。彼の妻も大学の先生で、IDカードを使い、色々な設備を見せてくれた。電磁波を使って、バングラデシュで砒素の多い食べ物を食べても健康に被害が出ないのはダル豆をよくたべるからではないかということ調べられないかと考えているという。日本には、もっと立派な施設が筑波にあるという。私には理解できないことばかりだ。

ジムの家で、早めの夕飯（牛肉と山羊肉のバーベキュー、マッシュポテト、インゲン）を食べビールを飲んで、ジムの運転で大学の施設であるエマ湖のコテージへ。ジムにカナダの飲酒運転について聞いてみた。アルコール検査で引っかからなければいいとのこと、自分の場合はビール1本なら問題ないとのこと。コテージに着いたのは、9時頃だった。薄暗い中、眼前に湖が広がっている。ここで、学生たちがそれぞれの専門のワークショップを受けるそうだ。湖の前の看板には、泳ぐなど書いてあるのではなく、自分のリスクで泳げと書いてあって、根底に流れる考え方の違いを感じさせる。コテージは、なかなか立

派なもので、私たちがは、ツインベッドとシングルベッドの二部屋、ソファの置いてある部屋にシャワー、トイレ付きだった。

翌朝、目の前に広がる湖の光景に感激。コテージは、それぞれ大きさも形も違うものが 30 以上もある。食堂には、ベーコンとスクランブルエッグ付きの今までにない豪華な朝食が準備されていた。住み込みの調理人が居るといふ。コテージ利用者は、私たちだけ。暑くも寒くもなく、虫も少なく最高の時期だといふ。カヌーに初めて乗る。方向を操るバックにスーザン、前が私、同様にジムが後ろ、夫が前で、二隻そろって湖の中央にこぎ出す。実に穏やかで、静かで、気持ちがいい。小島に係留しては、夫たちは森林調査。一旦、戻り、今度は、湖の周囲を車で回り森林調査。スーザンがキノコの本を持ってきたので、入念に調べながら、食べられるキノコを採る。見極めは難しいが、ナイフで切っただけで中を調べたりもして、本と照合する。昼食後、再び、カヌーに乗る。今度は小島でもっと綿密に調べながら歩く。食べられるキノコの群生地がたくさん収穫。バスケット一杯になる。再びカヌーに乗って戻るとき、今回は、ペアを変えて、私とジムの組み合わせになったが、私が前に乗り、ジムが後ろに乗るところで、どうしたわけかバランスを失い、カヌーが転覆。何と私は湖に投げ出され全身ずぶぬれ。戻ってシャワーを浴び急いで着替えて食堂へ。ジムがすまなさそうにしている。夕飯に収穫したキノコの一部でジムがバター炒めを作って、夕食のおかずの 1 品に。ワイン 2 本を 4 人で開けた。ジムは控えめに飲んではいるが、運転大丈夫か。食後、美しい景色を十分に目に焼き付け、コテージを後に 2 時間ぐらいかけて家へ帰る。途中鹿の親子に出会う。大平原をどこまでもまっすぐな道を走るわけだから、テクニクは必要ないが、居眠り運転が心配で、時々ジムに声をかける。家に無事たどり着いたときは、ホッとした。洗濯機を借りて、濡れた洋服、今までにたまった汚れ物の洗濯をさせてもらう。ジムの家は外から見たら、1・5 階建てだが、地下が 2 階になっていて、ゲストハウス 2 室及びトイレバスルームは地下 1 階、洗濯室・日曜道具室、ワインキャブは地下 2 階、1 階は、広々としたキッチンとリビング、中 2 階に主寝室とバス・トイレがある。冬のマイナス 20 度にも下がる寒さに対応した家の構造か。男性 2 人は収穫したキノコの下処理をし、インターネットで探し手に入れたという優れたものの乾燥機（彼らは、トマトも、スモモもすべて乾燥させて、長期保存している）で、干しキノコを作っている。洗濯している時に、前から気になっていたスーザンの名前について聞いてみた。東欧の出身のような名前だったので、元々そちらの出身か聞いたら、前の夫がその出身で、自分は研究者としてこの名前を長年使っていたし、10 歳の娘もこの名字を使っているのだから、そのまま使っているとのことだった。ジムも、初めの奥さんとは離婚して 26 歳の娘がいるし、亡くなった前の奥さんには子供がいたし、何と複雑な家族関係になるのだろうかと思った。夫曰く、前に来たときは、ジムの娘が前の奥さんと一緒に来ていて会ったり、前の奥さんの再婚相手とも会ったりしたとのことだから、何とも理解しがたい。

9 月 4 日は、7 時過ぎに家を出て、二人が空港まで送ってくれた。今日から新学期で、新生が入ってきて、大学は凄いことになるとのこと。始まる前で良かった。

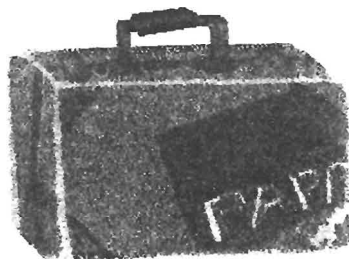
次の目的地バンクーバーは大都会で、ニューヨークを思わせる。冬季オリンピック開催を 3 年後に控え、至る所が建設工事中で騒然としている。しかし、港の風景は美しい。空港近くのホテルに荷物を置くと、すぐバスでダウンタウンに出てみた。バスに乗るとき、

二人で合計額6ドル50セントを用意していたが、運転手が紙幣は一切うけつけないと言う。乗客に頼んで両替してもらえという。何と不親切な!と思ったが、すぐ乗客の一人が申し出て換えてくれた。やれやれ。ウォーターフロントセンターの情報センターで地図をもらい歩く。ロブソン通りには、中華料理は勿論、タイ、ベトナム、インド、日本料理の店もたくさんある。韓国料理も目につく。バンクーバーは、中国人が多いと聞いていたが、目についたのは、韓国人の若者の数の多さだ。韓国の英語熱がここにも波及している感じだ。スタンレー公園を歩く。無料バスを時々利用しながら、一周する。昨年の大嵐で、大木がかなり倒れ、未だ通行止めになっている道もあるという。確かに凄い被害だったようで、所々でその爪あとを見る。その後、ブリティッシュコロンビア大学(UBC)へ。この日からここも新年度が始まり、イベントの片づけをしていた。構内にある、ビクトリアで客死した新渡戸稲造の功績を記念して作られた日本庭園を探し、たどり着いたときは、閉園20分前。入園料5ドル取るのは、維持費にお金がかかるからだろう。そんなに広くはないが、きちんと手入れされた庭だった。一番の目玉だと言われる人類学博物館に行けなかったのは残念。夜は、ロブソン通りの日本食レストランで、ワイルドサーモン照り焼き、天ぷらの盛り合わせを注文、ついていたみそ汁がおいしかった。日本料理店の客は、日本語の話せる外国人が多いようだ。店員と日本語で話せるのがいい。バスでホテルに戻る。郊外行きのバスには自転車を乗せる金具が外について、便利だ。バスは夜中の2時頃まであるそうだ。

朝7時ホテルからウィスラー行きのツアーに参加。バンクーバーから北へ120km、冬期オリンピックの会場となるこの地への道は、岩を砕いて拡張したり整備したり工事が急ピッチで進められている。ジョージア海峡沿いに上がっていく海沿いの道からは、素晴らしい眺め。ロッククライミングの名所といわれている白い絶壁には、人影が見える。途中休憩した場所を、観光用の列車が通過した。ツアー参加者の夫妻から声をかけられる。彼らは、イタリア系カナダ人だそうだ。日本に旅行したことがあり、とてもいい思い出になっているとのこと。セントルイスから来ている親子の娘さんの方も日本に来たことがあるそうで、日本語で挨拶してくれる。クエートから来ている女学生は、カメラ2台を駆使して風景を納めている。日本語の場合と同様にアラビア語からは離れた言語であるはずの英語を流暢に話し、言葉の壁は感じないらしい。私がアラビア語で挨拶したら、びっくりしていた。オーストラリアから参加の夫人は、ガイドの英語が速すぎると私たちを気遣ってくださる。大リゾート地ウィスラー到着。ウィスラービレッジは人がたくさん集まっている。カナダでは、今までも町で何人かの人に、何か手伝うことはないかと聞かれたが、ここでも、私たちが地図を片手に留まっているとすぐ声をかけてくる。とても感じがいい。現在カナダ政府は、アメリカ人を除くすべての入国外国人にアンケート調査をしている。どこでどう過ごし、何にどのくらいのお金を費やしたかなど。自由回答欄には、改善点や感想なども書くようになっていて。オリンピックを間近に控えているためか、観光国を目指しているためかは分からないが、この国の姿勢が、国民一人ひとりに浸透しているのかもしれない。ゴンドラでもっと山の上を上りたかったが、雲がかかっている無理だった。情報センターの人に勧められたロストレイクを一周して戻る往復2時間余りのコースを歩くことにした。湖の色もきれいで、泳げるように整備されている。犬を入れてもいい入り江が表示されていて、そこ以外は禁止ということだろう。森林の中の遊歩道は、気持ちがいい。忙しい観光客

が多いのか、ほとんど人影を見かけない。3時に集合してケベック市へ戻る。観光列車で来た8名が帰りのバスでは増えた。行きは通り過ぎた落差335mのシャノン滝もよかった。イラクからの学生の提案で、親しくなったツアー客数人と一緒に記念撮影。途中、行きとは違う道に入り込んだ。子供たちの公営自然体験教室の施設の見学だった。鮭をつかませたり、家畜の世話をさせたり、森林を歩いて体験させたりするという。千年という大木は、子供が周囲を、手をつないで囲んでみるという。木こりが木の途中に開けた穴は、根を使わないため、そこに足場を作り、そこから上の部分の木を切るためのものとのこと。切り口からはまた枝が出て、木が育っている。命を感じる。ケベック市ダウンタウンで降りてもらい、ベトナム料理の店で夕食を済ませる。絶品だった。まわりの客はすべて日本人だった。

バンクーバーからは、シアトル経由で成田に戻るが、面白い経験をした。バンクーバーで、アメリカ入国手続きをしたのだ。バンクーバーにアメリカの入国審査の出張所があって、また兩人差し指の指紋、写真をとられた。カナダにいながらにして手続き上はアメリカに入国したことになる。シアトルの空港で、マリナーズ、イチローのグッズを探したが、背番号の入ったものはなかった。シアトルから成田へのノースウエスト機は、がらがらだったので手足を伸ばすことができ助かった。アルコールの有料は変わらないが、何と映画が無料で見られた。羽田で1泊して9月8日やっと我が家へたどり着いた。今回の旅は、人生を深く感じさせるものだった。蛇足だが、松山空港からリムジンバスに乗って座席を見回したら、二人がけのシートを一人で独占している人ばかりで、座る場所が見つからない。荷物を置いている人に、頼んでやっと座らせてもらった。何だか情けなかった。他の国を旅行すると、最近の日本人のマナーの低下を感じずにはいられない。美しい国日本は美しい日本人でなければつれない。(T・H)



「マイ箸持参」考

昨年12月から約9カ月の間、体調不良の為極力外出を控えていたのですが、9月に入り体調も徐々に回復し猛暑も少し和らいで来たのを機に、少しずつ自力で活動を開始してみて、足腰の衰えや、家にこもっている間テレビがお友達状態だったせいか、脳の衰えを痛感しています。この間、年金問題、食品の偽装事件、政治家と金の問題、参議院選挙での民主党圧勝、突然の安部首相の退陣、真っ直中の自民総裁選（福田氏に決定）など、世の中は目まぐるしく動いていますが、私の頭はのんびりペースの今日この頃です。

さて、最近、森林保護の為に割り箸を使わないとして「マイ箸持参」の人が増加中らしいとの報道。マータイさんが「モッタイナイ」の言葉を世界に広めてくれ、「MOTTAINAI」の歌が子供達の間で歌われている。物を大切にすることは大賛成。プロ野球選手が試合中に折ったバットをお箸に作り替え販売したり、「マイ箸持参」の人には50円引きの食事処があったり、洗って使える塗り箸を利用している食堂（割り箸も準備してありますが）があったりもしている。持ち歩く為のおしゃれなグッズも売られているらしい。

以前（15年以上前になるでしょうか）私も「マイ箸持参」をしていた時期もありましたが、間伐材を利用し作られ、箸袋に入れる仕事を奪う等の理由を耳にし、現在も家で食べる場合の割り箸は断りますが、外食では割り箸を使っています。竹なら1年で大きくなるので罪悪感が少ないかなと思ったり、100円ショップに行けば輸入品だと思いますが50繕～100繕（材質にもよるのでしょうか）も入っている物を売っています。国産割り箸を推進する向きもあります（ある新聞記事に因ると「割り箸は森林を伐採し製材した後の端材を加工して作られる。立ち木が製材され建築製品になるのは元の半分しか無い。枝はもちろん木の端は捨てられる運命になる。その捨てられる中から割り箸は作られる」とある）国内材木を利用し家を建て、そこから出た端材を割り箸にする。外国の立ち木を保護し国内林業保護する上でも多少割高でも利用した方が良いのか。とにかく必要以上に割り箸を使用しない事が大切でしょう。この動きがブームで終わらない事を願うばかりです。

昔、母が割り箸の事をショウドク（消毒）箸と言っていたのを思い出し、割り箸状に切りばなしのまま商品になっているはずもなく、どの様に処理されているのか今更ながら心配です。（03年には市販の中国製の割り箸を検査したところ、防カビ剤や漂白剤の残留物が検出された為、厚労省が検査体制を一段と強化した。週刊朝日2007.7.20 より）我家でも100円ショップで購入したマイ箸・菜箸・竹串・つまようじ等を使用しています。現在手元にある商品を使い切り、買い替え時には自分なりの価値観にあった物を選びたいと思います。皆さんはどう思われますか？

「リサイクル施設解体後を議論 東温市検討委初会合」の記事に、ごみ袋完全有料化の方向性を決めるとあります。9月に配布された「東温市環境基本計画概要版」によると、「近年のごみ排出量は微増傾向にあり、資源ごみの割合が増加しています」とあり、今後のごみ行政の動きに注意しておく必要があります。

A. M

乳幼児医療費助成
無料化年齢
引き上げを
市農
局直しを検討すること
なることだ。
今夏設置予定だった
補助金等審査委員会
近藤千枝美（公明）渡部
伸二（無所属）玉之井進
長は、二人分の一般公費
枠に応募がなかったが
孝二（同）佐伯強（共産）
佐藤兼兼（同）大西佳子
（無所属）白戸寧（同）
伊藤隆志（同）の士氏
が一般質問。
1002年十二月に鑑
業停止したリサイクル
センターのごみ焼却施設
制度見直しで、高須賀功
市長は「就学までの通
院費を無料化できない
場合、可能な範囲で無料
化年齢を引き上げるよう
度」に解体工事を行う方針
を求めていると答弁。市

2007年9月20日（木）愛媛新聞

解体後を議論
リサイクル施設
東温市検討委初会合
補助が得られると説
設置の約三割について国
の補助が得られると説
明。資源ごみのストック
ターやハイオライゼ
ター（同市即内）解体は
燃料など新エネルギー
関連施設など三つの利
用業を赤した。ごみ袋完
全有料化について市は○
六日、前市長奈良の市役
所であった。一〇〇八年
度にかつ、解体後の跡地
を利用やごみ袋完全有料
化の方向性を決める。
検査は区長や学識
待できる」と述べた。

検査者16人で構成。初会
合には委員や市幹部の十
五人が出席し、委員長に
阪本忠明、愛媛大名佛教
授を議長とした。
一億五千万円とされるを
ンター解体費用に関し、
市の担当者が跡地をリ
サイクル関連施設に利用
すれば解体と新施設建
設費の約三割について国
の補助が得られると説
明。資源ごみのストック
ターやハイオライゼ
ター（同市即内）解体は
燃料など新エネルギー
関連施設など三つの利
用業を赤した。ごみ袋完
全有料化について市は○
六日、前市長奈良の市役
所であった。一〇〇八年
度にかつ、解体後の跡地
を利用やごみ袋完全有料
化の方向性を決める。

2007年9月7日（金）愛媛新聞

ジャコウアゲハの舞う庭に！

アッ！ジャコウアゲハだ！！ 「はじめまして」「ようこそ」と広げた両手に近寄ってくる。ひらひらひら、ゆっくりと優雅に舞う姿をしばし目で追いかけた。とうとう我家の庭にもジャコウアゲハが飛ぶようになった！！

2001年、蝶に詳しい「くらしの学習会」の会員Kさんとご主人が編集・撮影をし「くらしの学習会」が発行した本『蝶のくる庭』に出合って以来、蝶の好きな蜜を出す花や幼虫の食べる植物を育てて蝶の舞う庭をつくってみたいと思っていた。

「くらしの学習会」では、会員で協議し、まず近くの重信川の土手に自生しているウマノスズクサだけを食べて生育するジャコウアゲハを保護するため、その草を刈ってしまわないよう、東温市や国交省重信川出張所をお願いに行ったり、安全な場所に移植したりしていた。

2005年6月には「井戸端だより 50号」記念にと『ジャコウアゲハの絵ハガキ 8枚組～自然再生ジャコウアゲハと共に～』を作り、パネルを作成し重信町内での広報活動や販売もした。

一方、私は、ウマノスズクサを土手から取ってきたり、Kさんから株を分けてもらったりしていたがなかなか根づかなかった。ところが今年の夏になって梅の木に絡みつき、先端に花までつけているウマノスズクサに気がついた。Kさんに連絡するとすぐジャコウアゲハの幼虫を2個持って来てくれた(7/31)。2～3日は確認出来たがいつの間にか行方がわからなくなった。Kさんにそのことを言うと「うちへ飛んで来とるんやろ。相手を求めて飛んでくるから」と「500メートルは離れているのにそんなものなの」と私。Kさん「今、幼虫がたくさんいるよ」という。急いで貰いに行く(9/6)。Kさんの家への路地を曲がると数匹のジャコウアゲハがひらひらと出迎えてくれる。8個のジャコウアゲハの幼虫とツマグロヒョウモンのさなぎを1個貰ってきた。

8個の大家族で引っ越してきたジャコウアゲハの幼虫をウマノスズクサに乗せてやる。黒い点ほどの足で茎にしがみつき、耳を近づけるとボリボリと音がするくらい食欲旺盛。身体中に小さい無数の突起がありその先端は赤、体の中ほどにあるオレンジ色はリボンのようでなかなかのおしゃれ。朝に夕に、梅の木の周りを座ったり背伸びしたりしてその幼虫を見つけては胸を撫で下ろしていた。

それらが引っ越してきてから2日目、ツマグロヒョウモンの羽化するところ

ろが見たかったので部屋の中の目立つ所につるしていた。いつものように「おはよう」と声をかけ朝の支度。食後のコーヒーを飲みながらふと見ると蝶が！ 下には血が・・・産みの苦しみがあったのだろう、何ともいとおしい気がした。手の平にのせると腕を伝い、たまたまオレンジ色の花模様のワンピースを着ていた私の肩ににじり寄ってくる。くすぐったい。『蝶のくる庭』で調べてみた。ツマグロヒョウモンのメスだ。庭に放してやった。ランタナ、エビソウ、ノウゼンカズラ、ヒマワリ等の花の蜜を求めて飛び始めた。その時同時に視界に黒いものがひらひら、アレッ！ ジャコウアゲハ！！ 最初に貰った2個の幼虫が羽化し我家の庭に留まってくれた！ 感激の一瞬・・・の後は写真撮影。蝶もとびまわれるようになり嬉しいのか、なかなか落ち着いてくれない。生まれたてのツマグロヒョウモンとジャコウアゲハを何とかデジカメに収めることが出来た (9/8)。

その後『蝶のくる庭』の本が大活躍。今まで何気なく見ていた蝶の名前を調べる。名前の付け方も面白い。雌雄の区別も楽しみ。あれはツマグロヒョウモンのオス！ メスもいる！ あのジャコウアゲハはオス！ 多いのはナミアゲハ！ ナミアゲハは裏側の方が色合いはきれい。キチョウ、モンシロチョウもよく飛んでくる。シジミの種類もよく観るが小さくて動きが敏捷なので模様の識別が出来ない。

ところで、8個のジャコウアゲハの幼虫のその後はと言うと・・・ウマノスズクサをたっぷり食べ、今オレンジ色のさなぎになって、木や家の外壁にしがみついている。この形はまたなんとも奇妙。羽化が近くなると黒っぽく変身するという。いつも「こぼしさ〜ん」と遊びにくる小学2年生のボーイフレンドや下林の会員にその自慢話をした。来年から仲間が増えそう。

昨日はメスが2羽、今日はオスが1羽の仲間が増えた。ランタナの小花に忙しく口を突っ込み瞬間に蜜を吸う間も羽をふるわせている。傍まで顔を近づけても逃げようともしない。ジャコウアゲハの羽化を見ようと今、木にしがみついたさなぎを1個家の中に吊るしている。全員が無事大人になってくれますように。格別に暑かった今年の夏、蝶に寄り浴ったおかげで心安らぐ日々を過ごすことが出来た。家族が増えた気分である。

9/24 記 (Si・K)

ジャコウアゲハの名前の由来

オスを捕らえると、強い麝香(じゃこう)の様な香を出すことから命名された

ボランティア

近くに住む妹とそろそろ何かボランティア活動を一緒にという話題ができました。私達に何ができるだろうかとインターネットで検索。

最初は足裏マッサージは気持ちがいいから 病院で月に一回くらいできるかもねと妹が言ったのですが、私達に足裏マッサージの技術はないよという、資格の一步手前くらいは習ってからじゃないとだめだねと、諦めることになりました。資格の一步手前とはいえ、費用も時間も私達には挑戦できそうではありませんでした。

その内に、妹には私から見てもぴったりのボラティアの依頼があり、インターネットでのボランティア検索は私のためだけになってしまいました。

愛媛県でボランティアと検索すると、西条市で中国児童教育援助協会が目にとまりました。代表は菅（すが）さんという若い女性です。ホームページを読み進めると、中国の子供達の就学援助をしていることがわかり、久しぶりに本物に出会えたような感動がありました。中国の子供といえば、すぐに、一人っ子政策が頭に浮かびますが、農村部は学校に行きたくても行けない貧しい子供たちがいるんだとわかりました。国が広い中国ですから、富んでいる地域と貧しい地域があるのはわかります。ホームページの中の子供達は、援助をしたい気持ちにさせる子供達でした。

現在の日本では就学できない子供達はゼロに近いのですが、親の教育放棄やわが子への虐待の問題があり、社会構造や格差社会の問題と重なり、このままの仕組みではこの国には住みたくない国になりそうです。この国では、経済成長と引き換えに多くの大人たちはお金を集めることに心を奪われ、労働派遣法により若者達の貧困層が厚くなっています。働いても働いても生きるだけの賃金しか受け取れない仕組みを大人たちが作ってしまったのです。この仕組みを後10年も続けると、この国にも学校に通えない子どもたちが出てくるかもしれないほどの社会問題です。幸いなことに 多くの大人はこの責任を取らなければならない事が解かり始めています。格差社会の仕組みを作ったことの反省が生かされることに期待しています。

日本人はネパールやザンビアやユニセフなどでも協力をしています。ですが、私はこの愛媛の西条市で、ボランティアに取り組んでいる菅さんを応援

したいと思いました。

数日後、くらしの学習会があり、会員に内容を話すと興味をもってくれ、私が話した内容はホームページの中のほんの少しですが、会として何が出来るか、課題として取り組んでくれることになりました。最初は講演会を開いて子供達の就学援助金を集めたらいいという意見が出たのですが、数年前に、市内のアカシアの会で中国児童教育援助協会の代表の菅さんの講演会があったので、講演会を開くことは再考したいと考えました。その後の菅さんのお話しでは東温市内の会員はいないということでしたので、彼女の講演会は課題事項とします。

次号には菅さんの投稿が予定されています。9月に中国の子供達に会いに行った会員さんからの報告を含めての内容になります。

菅さんから送ってもらった現在の資料を今号の最後に加えますので、ぜひ読んでください。

(M. T)





ストレスは怖い



車の免許をいつ返そうかと思いつつ、あと三年続けることにした。70歳を過ぎると車の運転を続けるには、高齢者講習を受けなければならない。三年前にも受けているので2回目だが、やはり緊張した。

決められた日に「あいしょくドライビングスクール」に行くと、おじいさんばかりが20人程集まっていた。一人だけの女性だったが、私も年寄りの仲間なんだと改めて思った。最初に教官から日程の説明があり、三人ずつの組になり、運転のシュミレーションを行った。ヘッドホーンから聞こえた声の通りにハンドルやアクセルブレーキと踏むのだが、行動が鈍くなり思う様についていけない。孫に代わってもらったら早いだろうなあと思いつつ、終わりが近づくと、評価をもらってがっかり五段階の一も付いていた。

次に教官付きで外に出て、教習所の練習場を走った。狭い道路に次々とあらわれる指示に従って回ったが、教官から「あなたの車には怖くてよう乗らん」と迄言われて、落ち込んでしまった。6300円も払ってストレスいっぱい家で帰ったが、疲れきってぐたぐたになり何も手に付かない。

病身の夫の夕食の準備だけして、布団に入ったが寝れない。やっと眠ったと思ったら、金縛りに合い「ギャーギャー」叫んでいた。これではと思い安定剤を飲んで眠ったが、朝方に大雨の凄まじい音に気づき、窓を開めようととび起きた。寝惚けてベッドと床を間違えスタスタと歩いたら、ベッドからすってんころりと落ちてしまった。やっと自分の行動に気づいたが、扇風機にぶつかり、額も鼻も唇も血が滲んで痛くて痛くて、朝まで冷やしながら横になったが、眠れなかった。

ストレスがこんなに怖いものだとは思っていなかったが、日頃の生活も運転も焦らず騒がず、ゆったりとした生活をし、ストレスを溜めない様に生きたいものである。

(s. k)



雑感

厳しい残暑の中にも秋の風を感じるようになり、次々に刈り取られた稲の束が稲木に架けられ辺りが芳ばしい香りに包まれています。刈り取りが終わった稲田でムクドリの子が忙しそうに餌をあさり、畔道の彼岸花の朱が秋の空に映えてあざやかです。春に我が家を楽しませてくれたモズとの再会を楽しみにしているところです。曇天で諦めていたにもかかわらず、後半楽しむことのできた皆既月食の頃から夜毎に練習が始まっていた虫たちの演奏も、雨上がりの中秋の名月の月明かりの中で見事な音色を奏でていました。

北海道では大雪山系の紅葉とか旭岳の初冠雪が報じられています。

当たり前前の季節の移ろいが有り難く、大切に感じられます。

自然の一部である私達人間の生活はあまりにも“当たり前のこと”を置き去りにしている様で気に掛かります。歩行者のいない道路、眠らない町、家族が揃わない食卓が多くなり、理解しがたい事件が増えすぎている現在、一昔前には当たり前だった生活を取り戻さなくてはならない時なのかもしれません。

「脳を鍛える」ゲームソフトで話題の大脳生理学者は創造力や抑制力など人間らしさを支配する前頭前野は“文章の音読”“単純な数の計算”“料理を作ること”で活性化されるとし、日常生活においては、“早起き”“規則正しい食生活”“本を読む事”が大切だとしています。また別の学者は“体内時計”における一日の長さは24時間とは1時間程度のずれがあり、そのずれを補正するのが朝の明るさだとも言っています。一つの学説に過ぎないかもしれませんが、人間らしさが失われてしまっている様に思えることの多い昨今、実践してみる価値はありそうです。

最近、地域での助け合いこそが災害時に必要だと言われ、地域防災ネットワーク作りが進められています。もう20年近く前になるでしょうか。我が家の近くで深夜に火事がありました。はかどらない消火活動を見守る私のそばに近くの商店街のAさんが現れました。

“おばあちゃんが近くに親戚がないあなたの家が類焼したら大変だから見ておいでって”我が家のことを心配して冬の寒い夜更けに、わざわざ来てくれたのです。本当に有難かったことを思い出します。これこそが“地域力”の原点だと思います。“地域力”向上には作られたネットワークより、元気な商店街がある、歩きたくなる街づくりだと思います。歩いていれば、出会った人と自然に会釈を交わします。周りの景色にも敏感になります。歩行者が多い地元が生活の中心になれば、子供達を安心して外に出すこともできると思うのです。今年の夏休み、殆ど子供達が外で遊んでいる姿を見ることはありませんでした。“地元商店街は文化の源”と評する人もいます。私自身、料理方法から地元の慣習、行事などの総てを地元の商店街の人たちに教わりながら、結婚して35年、15回にもなる転居を乗り切ってきました。昨今の商店街の衰退は寂しい限りです。

夏休み直前に襲った中越沖地震では、原発の耐震性と対応の問題点が露呈されました。今回 M6.8 を起こした海底の活断層の存在を見逃していた為、柏崎刈羽原発で想定していた 273 ガルの 2.5 倍の 680 ガルという強さで揺れた為だということです。伊方原発の場合、476 ガルを想定しているそうですが、6 km 先に活断層がある為 800~1000 ガルの揺れは起こり得るとする識者もいます。自然に対してもっと、もっと謙虚になった方が良さそうです。

当たり前のことですが、総ての建造物は経年劣化を起こします。アメリカでの橋脚崩壊は、そんなことを私達に気付かせた事故でした。愛媛県でも古い橋脚の点検が始まった様ですが、ある自治体では、今まで全く土木には関係の無かった職員が急遽点検業務を命じられ、マニュアルにある専門用語に、辞書を片手に手探りで苦労している様子をテレビで見る機会がありました。怖いと思いました。公共事業を受注した業者にはそれを取り壊すまでの全期間の責任と保守、点検を義務付けて欲しいものです。

何かと話題の M.ムーア監督の映画“シッコ”ではキューバの医療体制の充実の様子が描かれているといます。キューバはとても貧しい国ですが、乳児死亡率は米国より低く、WHO が太鼓判を押し、世界が手本にするほどの医療大国だそうです。“民間でできることは民間で”“小さな政府”の行き着いた先、医療を利潤動機に委ねた米国の現状と、生活指導と伝統医療の工夫、低医療費による良質なサービスの母体が共同体でその中核に医師がいるキューバ。長野の農村で地域医療に取り組む医師は“医師の人格教育と地域に根付く予防医学を重視するキューバに、膨張する医療費の重圧に悩む我が国を含む先進国の問題解決のヒントがある”としています。

今回の参議院議員選挙で、選挙権の無い人にも被選挙権があることを知りました。吃驚しました。

夏のある日、地元の小野中新聞をいただきました。校内ニュースだけでなく、近くにポニーやヤギと触れ合える果樹園があること、地元の平井商店街の活性化プロジェクト、歩道が途切れている通学路のことなど、生徒の皆さんの熱意あふれる紙面を興味深く拝読させていただきました。

夏の終わり、我が家の二階から五年振りに懐かしい横河原の花火を楽しみました。

先日、三か村泉の絵葉書の写真を撮って下さった白方さんから田徑で絵画教室を始めるとの連絡を頂きました。9/26 から参加しています。両親の介護の為、8 年前に中断したボタニカルアートとは違い、滲みを利用した水彩画なので老眼が完了している私にも楽しめそうです。

我が家の、大型犬の大五郎に垣根越しの出会いが有りました。同じ犬種の雌犬のランちゃんです。ちょっとワクワクしている私です。

(K.O)

明治5年に「邑に不学の戸なく家に不学の人なからしめん」と始められたわが国の学校教育もそれなりの効果を挙げ、富国強兵の施策と相まってわが国を列強と肩を並べる文明開化の国に押し上げた功績は大であることは否めない事実である。しかし中曾根総理の設置した第二次臨時教育審議会の指摘を待つまでもなく、かなり以前からその歪みが見えてきている。そのことについて考えて見ることにする。

1. 学校教育で教えていること

それは国が法律で定めた学校教育法に基づき学習指導要領となって学習内容は定められている。その内容は、目的・内容・発達段階・教授方法・評価のポイントを観点にして編成せられている。ところがどのぐらい学習したかという評価が問題になる。評価をするためにテストなるものが行われる。学校社会では至極当たり前のことであり、教師も児童生徒もある意味異常なまでに取り組む。そのテストで出される問題の答えは一つなのである。あれも正答これも正答ということはない。従ってドリルで訓練すれば高得点は可能になる。

学校教育法を紐といて見ると、例えば小学校一年生の国語のところをみると「日常生活に必要な云々」となっており、子どもたちが毎日生活してゆく言語能力を豊かにすることが目的になっている。英語など最近がネイティブスピーカーが教室に出向いてくれるようにはなっているが、いずれにしても評価それも多人数相手の評価となればペーパーテストでしかない。それに成功すれば優等生ということになる。

① こんな話が

ある時、先生方と合宿研修を行った。朝、食事の準備をしている所へ行って、「飯炊いたか」と尋ねるとまだと言うので、米を洗いガス釜へ入れ水加減をしてスイッチを押した。ところが、「水加減したのですか……お米の量も分からないのにどうして水加減が出来るのですか？」お叱りの声が飛んできた。声の主は小学校の女性校長先生。大学で家庭科を専攻し長い間家庭科を教えてきた経歴の持ち主。

時間が来てスイッチが切れ、彼女が釜の蓋を取った。「あれ！ご飯が出来とる、あれ！」と声を上げる。何故、こんな阿呆なことになったのか。答えこうである。

学校では、ご飯を炊く時のお水の量はお米の { } 倍です。カッコの中に正しい数字を入れなさいとテストする。当時は1.2倍であった。これが正答。このように学校では原則論を教える。私はこれを学校知と呼んでいる。普通、われわれは、飯を炊く時の水は手で量った。そして「はじめちよろちよろ中ぱっぱ赤子泣いても蓋取るな」の方式で美味いご飯が炊けていた。これを生活知と呼んでいる。

この先生はその生活知を知らなかったことになる。

教師という仕事をしていた関係から先生方のことしか知らないが、今日の若者にもこうした問題が見られるのではあるまかど危惧している。

② 尊徳翁夜話

これは若い頃、国内留学をしていた時、外人講師に手渡されて読んだ本である。

二宮尊徳と言え、柴を背負い手に本を持ってどこの学校にもあった銅像あるいわ石像であるし修身の本にも草鞋を作って大人に渡したという話が載っていた人物である。

彼は江戸末期に疲弊した農村を立て直した篤農家である。

その彼が語ったという尊徳翁夜話の中に、「学問とは氷のような物也。解かして用いざれば物の用には立たず」という一節がある。

この一節を「いくら大学で英語の勉強をしても世の中で使うことで勉強しなければ世の中で通用する英語にはなりません」ということを教えてくれたものと受け取った。

2. ヒトが人になる教育

われわれ人類はヒトと呼ばれる動物である。生得的に持っているものではこの世に生きて行けない。後天的な学習が命を保障してくれる。動物行動学等の知見によれば人間以外の動物もわれわれと同じであってやはり母親等から生きる術を学んでいる。

われわれはヒトと呼ばれる動物として誕生するのであるが、人間社会の知恵を学習することによって人間になる。ところが教育と言えは学校教育のように受け取り、今日は学校さえ行かせておけばと考えるようになってきている。

上でも見たように学校教育で得たものは日々の生活にはそのままでは役に立たない。尊徳翁が言うように「水」にしなければならない。

① 生活知の獲得

ホモ・サピエンス・ヒト科のヒトと呼ばれるわれわれ先祖が地球上に現れてから20万年と言われるが、その間チンパンジーやさるなどとは異なる文化を創り種を維持し繁栄してきた。これを生活文化と呼んでおり子どもたちに伝えてきた。そのことによってヒトは人間と呼べる存在になり繁栄してきた。

ところが学校というシステムが発明され機能するようになりわれわれは錯覚に陥った。確かに、学歴は社会に通用する保障であり、学歴によって社会的地位が異なってくることは否めない事実である。親はわが子に無理をしてでも高い学歴を与えようと四苦八苦する。

しかしそれは日々の生活には役立たないことが多い。先に見たように学校では学問になった知識しか与えない。ご飯を炊く時の水の量はと言ったものである。これでは変化する時と場合には応じられない。尊徳翁のいう「学問を氷にする」ことが求められる。それは“try and error”、試行錯誤であり、やって見てなんぼの世界である。言うところの体験学習なのである。

また、それは自分からやるという学習者の自発性或いはやる気がなければならない。それは“learning by doing.”なのである。

さらに、こうしたことをしよと思う時、親はことばを使ってはいけぬ。ひたすら伝えたい技を「して見せる」だけにしなければならない。それを子どもたちがひたすら見て手足を動かして憶える。

チンパンジーなどの生活がよくテレビ放映されるが、親が木の実を割るのを見た子どもが失敗しながら何回も何回もやっている。やがて成功し木の実を食べることが出来るようになる。食べたいという意慾に支えられ、言うならやりたいからやっているのである。

② 社会教育の手法

学校での教育が発達したこともあって、最近では疎かにされてきた手法であるが、学習者の意慾に支えられ見習うという体験学習は、人類を繁栄させてきたものだけに忘れてはならない。これが尊徳翁のいう「学問を氷にする」手法である。

人間の知能はすばらしいと言う。教育の狙いは、「知を拓く」ことである。しかしそれぞれの個が意慾的でなければ知は拓けないようである。それだけに親はわが子を育てる時このことに心を置かねばならない。

親の仕事はわが子にこの文化獲得の方法を伝えることである。大きく言えば人類の知を

拓いてゆく夢の実現を可能にするのである。最高学府に学んだ知識を世の中で役に立つ知恵にするのも意欲的な見る力であり体験学習なのである。

現実の中から撥ね返ってくる情報を読み解き、自分が持っているものに照らし合わせて必要な情報を創り上げる力が生きる力である。その力が種を維持し繁栄に導いてきた。

教育を語る時、子の能力は無限だと言う。それは教えたものを記憶することではない。それをベースにして試行錯誤しながら必要な知恵を生み出すことである。

ま と め…………われわれは子どもの教育を学校だけに依存し過ぎている。学校には学校としての役割があるし、家庭には家庭固有の役割がある。いたずらに子育てのすべてを学校に任せるようでは親としてに資質を疑いたくなる。

その意味においても「親になる」必要がある。子を持つば親になれるのではない。親になる学習が求められる。それは人間としての成熟である。

われわれは言葉を使ってものを伝えようとする。しかしそれには限界あることを承知しなければならない。そうではなく伝えたいことをやって見せる。それを見た子どもなり大人は自分流に真似る。同じように出来ないかも知れないが段々に出来るようになってゆく。真似る→学ぶ、これがその人の学習能力になってゆく。「見て真似る」この見る力そして真似る力が長い人生の財産になることを知らねばならない。

学校方式だけでは出来ることしか出来ない。工夫も出来なければ新しい発想も生まれない。われわれ人類は、環境に果敢に挑みそこから跳ね返って情報を加工し新しいものを創ってきた。



中国児童教育援助協会

学校に通うことの出来ない中国の子どもたちの パートナー（里親）になりませんか？



中国の貧困地域には、教育の機会に恵まれない子どもたちがたくさんいます。中国児童教育援助協会では、そのような子どもたちが、将来に希望を持てるような環境を作るために支援活動をしています。そこで当会では、子どもたちが学校に通えるように支援して下さるパートナー（里親）を募集しています。

支援対象児童

貧困地域に暮らし、経済的な理由から、義務教育（中学校卒業まで）を受けることが困難な状態にある児童。

パートナー登録について

パートナーの方には年間：5,000 円の支援金をお願いします。この金額で、一人の子どもが1年間就学できます。（支援金は『雑費』と呼ばれる学費の一部に使われています。現在のレートでは、5,000 円のうち 3,400 円が子どもたちの学費として使われ、残り 1,600 円が送金や定期連絡にかかる通信連絡費に使われています）

なお、主な通信連絡経費は、送金代、郵便代、封筒、写真現像料、コピー代です。

会発足までの経緯

会代表である菅未帆は 1994 年から 97 年まで、青年海外協力隊員として中国の南方に位置する広西壮族自治区、柳州市の中国の一般の子どもが通う幼稚園で、幼稚園教諭として活動しました。その後、98 年から 2001 年まで国際協力事業団・青年海外協力隊調整員として北京市を拠点に勤務し、中国全土の貧困地域を回り、同地域を支援する機会に恵まれました。「帰国後も支援活動をしたい。特に学校に行けない貧困地域の子どもたちに就学のチャンスを与えてあげたい」その気持ちを中国の友人に伝えると、友人達も支援に賛同し、「一緒にやってみよう！！」と 2001 年 8 月にスタートしたのがこの中国児童教育援助協会です。中国人ボランティアと日本人ボランティアにより運営されている小さな会です。

パートナー（里親）になるためのお申し込み方法

電話・FAX・メールにてパートナー登録用紙をご請求ください。

協会連絡先

〒799-0413 日本国愛媛県西条市三津屋東 8-2 リバーサイドC 207
中国児童教育援助協会 代表：菅未帆
電話・FAX：0898-64-7121 E-mail：m_ihosuga@mbh.nifty.com

支援の流れ

1. 協会が、中国の奨学金希望児童と日本側パートナーの希望とを整理し、パートナー(里親)となっていたべく児童を決定します。



2. パートナー決定後、協会より児童の紹介レター、写真及びカードが届きます。
<カードは支援を受けている児童も持っています。>

(カードの内容)

あなたのパートナーは〇〇〇さんです。

- 1 一生懸命勉強します。
- 2 なるべくたくさんパートナーの方に手紙を書きます。
- 3 大きくなってお金持ちになったら、協会にお金を返します。
(または、協会のボランティアに参加します。)
対象児童氏名 _____



3. 半年に一度、定期連絡(子どもからの手紙)が届きます。
(中国は、前期が9月・後期が2月スタートです。定期連絡はこの学期開始前後に取りまとめます。よって、パートナーの皆様の手元には10月と3月頃、手紙が届きます。)



4. 定期連絡以外にも、子ども達と文通して下さい。

特別支援

(期間は協会が担当いたします)

子どもたちが通う小学校へ、机や椅子、体育用品、図書を支援するための募金キャンペーンも展開しています。また、ボールなどの体育用品、文具、鍵盤ハーモニカ(ピアニカ)など小学校で使用できる中古文具、楽器を送付する支援も実施しています。

中国紹介授業、講座を実施中!!

広く・楽しく中国を理解してもらうために授業や講座を実施しています。小学校の総合学習の時間、国際交流授業、企業セミナーなど、聞き手に合わせて楽しい講座をアレンジします。(例：小学生を対象とした授業：『中国茶やチャイナドレスを体験しながらの授業』 企業セミナー：テーマ「中国人とスマートに付き合う方法」など…お気軽にお問い合わせ下さい!)



編集後記



今年の夏は異常な暑さだった。みなさん、いかがお過ごしだったでしょうか。映画「不都合な真実」を観た。そのなかで、温暖化を示すさまざまな現象が取り上げられていた。たとえば、かつて見られた氷河がなくなってしまうたり、北極海では冰山が溶けてしまい、白熊が溺死している。我々は、煮られるカエルであってはならないとJ氏は言う。カエルは、自ら熱い湯に入ったりはしない。しかし、水の入った容器にカエルを入れ、熱していくと熱くなっていることに気づかず、煮られて死んでしまう。少しずつ進んでいるこの環境の変化に対し、鈍感であってはならないと思う。私たちには希望もある。かつて、フロンガスによるオゾン層の破壊が問題となっていたが、今では大分回復してきているではないか。この場合は、主に企業努力によるもので、私たち一人一人がなにか真剣に取り組んだというのではなかった。しかし、温暖化防止は、企業だけでなく私たちひとりひとりの意識改革が大切だ。今度は、私たちが真剣に取り組む番である。小さなことから、今自分にできることから始めていこう。

話は変わるが、私がこの編集をさせていただいたのが、ちょうど一年前の9月だった。安倍政権誕生のときである。そして今、福田政権誕生。今後の政治のゆくえを、しっかり見ていかなければと思う今日この頃である。



くらしの学習会では、随時会員を募集しています。

活動会員 2,000円/年 購読会員 1,000円/年
振込先口座番号（郵便局） くらしの学習会 01610-5-21026
問合せ先 TEL/FAX 089-964-6956
E-mail: kt-hayashi@nifty.com